

コ リ ュ ド ン
——『牧歌』訳注第二歌——

野 村 圭 介

Bucolikon 『牧歌』第一歌が対話体であるのに対して、羊飼いかリユドンの美少年アレクシスへの甲斐ない思いを縷々と綴った第二歌は、73行からなる独白体の詩である。『牧歌』10篇の中で、最も古いものとされ、紀元前43もしくは42年の制作と推定される。テーマとなった「報われぬ恋、不幸な愛」は、ウェルギリウスが生涯をかけて追求した主題の一つであり、『牧歌』に限っても、第六、八、十歌で詩人はくり返しこれを扱うこととなる。最も初期のものとされているにもかかわらず、第二歌はすでに高い完成度を備えた見事な作品である。冒頭の一行目から最終行まで、いささかの渋滞もなく、十分に練られた充実した詩句が続く。南欧の夏を舞台に、ボードレール風に言えば、色と匂いと音がコレスポンダンスした美しい一篇である。なお、この第二歌はテオクリトス、とりわけ Εἰδυλλία 『エイデュツリア』第三および第十一歌に負う所が極めて多く、その主なるものは適宜注で言及したい。ラテン語本文は、E. de Saint-Denis 編の通称 Budé 版に依拠した。

FORMOSVM pastor Corydon ardebat Alexim,
 delicias domini : nec quid speraret habebat.
 Tantum inter densas, umbrosa cacumina, fagos
 adsidue uneiebat ; ibi haec incondita solus
 montibus et siluis studio iactabat inani : 5

美しいアレクシスに、羊飼いいコリュドンは無我夢中だった。
 とはいえ相手は御主人のお気に入り、一縷の望みとてなかった。
 しげしげと鬱蒼と空を覆ったブナの茂みに足を運び、
 ぼつねんと山と森に向い、甲斐なくも思いをこめて、
 らちもなく声をはり上げるのであった。

«O crudelis Alexi, nihil mea carmina curas ?
 nil nostri miserere ? mori me denique coges.
 Nunc etiam pecudes umbras et frigora captant ;
 nunc uiridis etiam occulant spineta lacertos,
 Thestylis et rapido fessis messoribus aestu 10
 alia serpullumque herbas contundit olentis.
 At mecum raucis, tua dum uestigia lustrō,
 sole sub ardenti resonant arbusta cicadis.
 Nonne fuit satius tristis Amaryllidis iras
 Atque superba pati fastidia ? nonne Menalcan, 15

quamuis ille niger, quamuis tu candidus esses ?
 O formose puer, nimium ne crede colori !
 Alba ligustra cadunt, uaccinia nigra leguntur.
 Despectus tibi sum, nec qui sim quaeris, Alexi,
 quam diues pecoris, niuci quam lactis abundans. 20
 Mille meae Siculis errant in montibus agenae ;
 lac mihi non aestate nouom, non frigore deficit.
 Canto, quae solitus, si quando armenta uocabat,
 Amphion Dircaeus in Actaeo Aracyntho.
 Nec sum adeo informis : nuper me in litore uidi, 25
 cum placidum uentis staret mare ; non ego Daphnim,
 Iudice te, metuam, si numquam fallit imago.

ああ、つれないアレクシス、僕の歌など耳にも留まらないか？
 哀れな奴だと思わないか？ ついには僕に死ねと言うのか。
 今この時、家畜の群は涼しい木陰を求め、
 緑色のトカゲも茨の茂みに身を潜めている。
 テステュリスは、炎暑にへばった刈り手たちのために、
 臭いニンニクやタイムをつき碎いている。
 だけど僕は君の足跡を求めてさまよい、燃える太陽の下
 僕の歌に和して、蟬のしわがれ声が木々にひびき渡る。
 アマリリスの癡癡や高慢ちきを我慢したほうが
 まだましだったか？ それともメナルカスのほうが？
 色は彼は黒く、君は白いけれど。

ああ美しい子よ、色白をあまり当てにするな！
 白いイボタの花は散り、黒いヒアシンスの花は人に摘まれる。
 アレクシス、君は僕を馬鹿にして、僕がどんな人間か、
 どれ程たくさん家畜を飼っているか、
 雪のように白い乳がたっぷりあるか尋ねもしない。
 僕の千の子羊はシチリアの山の中を彷徨い、
 夏も冬も新鮮なミルクに事欠くことはない。
 僕は歌も歌える。かつてディルケのアムピオンが、
 アラキュントスの^{やまなか}山中で、羊たちを呼びながらいつも歌ったように。
 それに僕はそんなに醜くはない、このあいだ風が止んで海が凪いだ時
 水辺で自分を映してみたが。いや僕は君を行司にして
 ダブニスとはりあってもいい、もしその水鏡が本当なら。

«O tantum libeat mecum tibi sordida rura
 atque humilis habitare casas, et figere ceruos
 haedorumque gregem uiridi compellere hibisco ! 30
 Mecum una in siluis imitabere Pana canendo.
 Pan primus calamos cera coniungere pluris
 instituit ; Pan curat ouis ouiumque magistros.
 Nec te paeniteat calamo triuisse labellum :
 haec eadem ut sciret, quid non faciebat Amyntas ? 35
 Est mihi disparibus septem compacta cicutis
 fistula, Damoetas dono mihi quam dedit olim,
 et dixit moriens : «Te nunc habet ista secundum.»

Dixit Damoetas ; inuidit stultus Amyntas.
Praeterea duo, nec tuta mihi ualle reperti, 40
capreoli, sparsis etiam nunc pellibus albo :
bina die siccant ouis ubera ; quos tibi seruo.
Iam pridem a me illos abducere Thestylis orat ;
et faciet, quoniam sordent tibi munera nostra.

ああ、もし君が、僕と田舎の
つましい小屋に宿り、鹿を射たり、
子山羊たちを緑の葵のムチで追ったりできれば！
僕と共に森で、バーンさながら君は歌を歌うだろう。
葦を蠟でつなぎ初めて笛を作ったのがバーン。
バーンこそ羊や羊飼いたちの守り神。
君は葦で唇をすりむいたとて悔むことはない、
これを覚えるのに、アミュンタスは何を厭ったろうか？
僕は長さの違う七本の葦で出来た笛を持っている。
昔ダモエタスが僕にくれたものだ。今生の別れに
こんな風に言いながら、「次は君が持主だ」
ダモエタスはそう言ったが、アミュンタスの馬鹿は羨んだものさ。
僕はそれに、危ない谷で見つけた二頭の子鹿を飼っている。
背中にはまだ白い斑点が残っているが、彼らは毎日
羊の二つの乳房をすっかり空にする。これも君のものだ。
随分と前からテストュリスが欲しいとせがんでいるが、
多分そうなるだろう。君には僕の贈物が気に入らないのだから。

«Huc ades, o formose puer : tibi lilia plenis 45
 ecce ferunt Nymphae calathis ; tibi candida Nais,
 pallentis uiolas et summa papauera carpens,
 narcissum et florem iungit bene olentis anethi ;
 tum, casia atque aliis intexens suauius herbis,
 mollia luteola pingit uaccinia calta. 50
 Ipse ego cana legam tenera lanugine mala,
 castaneasque nuces, mea quas Amaryllis amabat ;
 addam cerea pruna ; honos erit huic quoque pomo ;
 et uos, o lauri, carpam, et te, proxima myrte,
 sic ositae quoniam suauius miscetis odores. 55

ここへおいで、おお美しい子よ。ほら君のためにニンフたちが、
 箒いっぱい百合を運んでくる。君のために美しいナイアードが、
 うす紫の^{すなれ}莖と^{けし}罌粟の花を摘み、
 水仙と香り高い^{ういきよう}茴香の花をそえる。
 そして、マヨラナや甘い香りの草々を組合せ、
 やさしいヒアシンスを黄色い^{きんせん}金盞花で引き立てる。
 僕自らは白い^{うぶけ}産毛のマルメロを集めよう。
 それに僕のアマリリスが好きだった栗の実も。
 蠟のような^{すもも}李も加えよう、それはこの実にとっても名誉なことだ。
 そして月桂樹、お前の葉も摘もう、お隣の天人花もだ、
 お前たちはそうして甘実な匂いをまぜ合わせることだろう。

«Rusticus es, Corydon : nec munera curat Alexis,
 nec, si muneribus certes, concedat Iollas.
 Eheu! quid uolui misero mihi ? Floribus Austrum
 perditus et liquidis immisi fontibus apros.
 Quem fugis, a! demens ? Habitarunt di quoque siluas, 60
 Dardaniusque Paris. Pallas quas condidit arcis
 ipsa colat ; nobis placeant ante ominia siluae.
 Torua leaena lupum sequitur, lupus ipse capellam ;
 florentem cytisum sequitur lasciua capella,
 te Corydon, o Alexi : trahit sua quemque uoluptas. 65
 Aspice, aratra iugo referunt suspensa iuueni.,
 et sol crescentis decedens duplicat umbras ;
 me tamen urit amor ; quis enim modus adsit amori ?

コリュドン、お前は田舎者だ。アレクシスは贈物などに興味はない。
 それに例え贈物で競っても、イオラスにかなうわけではない。
 ああ哀れな奴！ いったい何を考えているのか？
 正気を失った僕は、花々に熱風を澄んだ泉に猪を送りこんでしまった。
 愚か者よ、どうして僕を避けるのか？
 神々も、トロイアのパリスも、森に住んでいた。
 パラスは自分で築いた城に一人住めばいい。僕には森ほど素敵なところはない。
 恐ろしい獅子は狼を追い、狼は山羊を追いかける。
 やんちゃな山羊は花をつけた首^{うまこやし}蓍を、そして君、アレクシスを

コリュドンは追う。誰だって自分の好きなものを追い求めるのだ。

ごらん、牛は犁^{すき}を轆^{くびき}に掛けて家路につき、

沈み行く太陽は、影を二倍の長さに伸ばす。

でも恋の炎は僕の身を焦がす。一体いつこの思いは止むのか？

«A ! Corydon, Corydon, quae te dementia cepit ?

Semiputata tibi frondosa uitis in ulmo est. 70

Quin tu aliquid saltem potius, quorum indiget usus,

uinimibus mollique paras detexere iunco ?

Inuenies alium, si te hic fastidit, Alexim.»

ああ、コリュドン、コリュドン、何という狂気にお前はとりつかれたのか。

お前の葡萄は半ば刈られたまま、葉の繁った楡^{にれ}に巻きついている。

なぜ甲斐あることをしないのか、柳の枝や

しなやかな葦で何か編もうとしないのか？

アレクシスがお前を馬鹿にするなら、お前は別のアレクシスを見つけるだろう。

注

1～5(行目)：第二歌は、コリュドンのアレクシスへの愛を客観的な立場から簡潔に状況説明する1～5行の序の部分と、以下6行目から最終の73行目まで続くコリュドンの独白との二部から構成される。

1 Formosum pastor Corydon ardebat Alexim : 劈頭一篇のテーマをずばりと提

示する。近代語風の語順に直せば, *Corydon pastor ardebat formosum Alexim* とでもなろうが, これでは同様の意味を伝えながら, アレクシスの本質に係る「美」*formosum* とコリュドンの本質に係る「(平凡な) 羊飼」*pastor* を最初の二語に並置した原文に比べ, その力, 表現力, 緊密, 緊張度において歴然とした差がある。十全な屈折語故の語順の自由というラテン語の特質を存分に発揮した見事な冒頭の一行である。Coleman はこんな風に言う, *The line illustrates the expressive possibilities of word order in a language where the inflections suffice to determine grammatical relationships. The juxtaposition formosum pastor sets the essential antithesis between the lover who is not handsome and the male beloved who is not a shepherd.*¹

また F. Plessic et P. Lejay は *Formosum pastor* を *rapprochement significatif* と言い, この *antithèse* が全篇の基底をなすとする。²

Corydon: ギリシャ語で *κορυδός* (*korydós*) は「ヒバリ」の意。この第二歌で熱情のあまりほとんど支離滅裂な歌を歌うコリュドンは, 面白いことに第七歌では, テュルススを相手に歌合戦を行い見事にその勝利者となる。Perret の注釈を引けば, *Corydon est un nom pastoral ; il est attribué dans THCR, 4 (テオクリストス『エイデュッリア』IV), à un paysan bonasse et naïf, dans THCR, 5, 6, à un rustre maladroit. Dans B7 (『牧歌』VII), Vg (ウェリギリウス) fera de Corydon le maître de la plus haute poésie. Le C. (コリュドン) de B2 est conçu plutôt à l'image de ses homonymes grecs. Le nom d'Alexis n'apparaît pas chez les Bucoliques grecs ; c'est un nom citadin qui vient sans doute à Vg d'une pièce de Méléagre.*³

ardebat: ardentier amabat, aimait éperdument.

2 **domini**: 57行目の豊裕な *Iollas* を指すのであろう。また彼はコリュドン, アレクシス両者の主人ではなく, アレクシスのみの主人と解するべきだろう。

nec quid speraret habebat : Forbiger は quid と quod のニュアンスの相違をこんな風に説明する, *non habebat, quid speraret*, i. e. omnia ei circumspicienti nusquam apparebat ulla spes, *er wusste nicht, was er etwa hoffen sollte*, 対して *non habebat id, quod speraret*, i. e. nulla ei erat spes, *er hatte Keine Hoffnung*.⁴ 同様の事情を Plessis et Lejay は simple nuance, à vrai dire と断りながら, quid の場合を《il n'avait pas raison d'espérer》と訳し, quod なら《il n'avait rien à espérer》となろうと言う。⁵

3 **densas, umbrosa cacumina, fagos** : umbrosa cacumina は densas fagos の同格。語順に注意, densas と fagos の間に同格の umbrosa cacumina が割って入っているのが面白い。同じブナの木 fagus を扱いながら『牧歌』I では, Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi 「ティテュルス, 君は枝を上げたブナの木陰に身を横たえ」とある様に, 主人公は閑暇を満喫しながらブナの木陰にねそべり, のんびりと箏笛を吹いている。一方第二歌のコリュドンは, 熱い思いに心も乱れ, 足繁くブナ林を訪れては, 茫然と立ちつくしたまま, 思いのたけを歌に託してわめき立てる。もちろん詩人の意図するところであったであろう, この対照の妙が実に興味深い。昼なお暗きブナの森, 我国においても昔から「恋は闇」と言うではないか。恋は盲目, 恋の闇, 恋路の闇。

4 **ueniebat** : 1 ~ 5 行目の序においては, ardebat, habebat, venibat, iactabat と, 過去の継続, 反復, 習慣を示して, 動詞がすべて未完了過去に置かれている。

incondita : id est incomposita, subito dicta, agrestia;⁶ le désordre de la passion, mais aussi l'absence d'art qui sied à un berger.⁷

5 **montibus et silvis** : 場所を示す奪格ではなくて与格, すなわち「山と森に向って」。アレクシスを相手にではなく, 山や森を相手に思いのたけをぶちまけざるを得ないのが, いささか物哀れでも滑稽でもある。

studio iactabat inani : *Jactabat* et *studio inani* sont deux expressions qui se font valoir et se complètent l'une l'autre, *jactare verba* signifiant laisser échapper avec rapidité des paroles qui se perdent dans leur emportement.⁸

6 **O crudelis** : motif traditionnel de la sérénade amoureuse; mais d'ordinaire l'objet aimé peut entendre; et ici le chanteur n'a pas le moindre souvenir commun, la plus légère faveur à rappeler. Alexis, selon toute apparence, ignorera toujours jusqu'à l'existence de Corydon.⁹

7 **nostri miserere** : デポネント動詞（形式所相動詞もしくは能動欠如動詞）*miserere* は一般に属格をとる。例 *miseremini familiae, iudices, miseremini... patris*（キケロ）; *Iugurthae fortunarum miseri*（サルスト）

denique : finally, in the end; en fin de compte, finalement

coges : *cogo, ere, coegi, coactum* のもちろん未来形、現在形 *cogis* を取るテキストもある。¹⁰ テオクリストスにはこうある。'Απάγξασθαί με ποιησεῖς (*Apágxasthai me poîseis*) 「お前は私に首をくくれと言うのか」『エイデュッリア』Ⅲ, 9

8～13: この6行に描かれた炎暑の午後のピトレスクな光景はきわめて魅力的である——木陰を求める羊や牛、茨のしげみに身を隠す緑色のトカゲ、暑さへばった刈り手たち、食事の準備を始めた女、蟬の声。色と匂いと音が相照応する、猛暑の昼下りを生き生きと描いたこの6行は、ウェルギリウスのなかで私（訳注者）が最も引きつけられる詩句の一つである。なおこのくだりは一種の対句構造になった2行の詩句を3つ組み合わせて成り立っている。すなわち家畜とトカゲの8, 9行、刈り手と女の10, 11行、コリュドンと蟬の12, 13行。

8 **Nunc etiam pecudes umbras et frigora captant** : 第一歌（51～2）には, *hic inter flumina nota et fontis sacros frigus captabis opacum*. 「君はこの慣れ親しんだ川の流れと聖なる泉に、涼しい木陰を求めることだろう」。capto は capio

の verbe fréquentatif (反復相動詞)。umbras et frigora は umbras frigidas の hendyadis (一つの表現を2つの要素に分解する修辞法)。

9 **nunc uiridis etiam occultant spineta lacertos**: ἀνίκα δὴ καὶ σαῦρος ἐν αἰμασταῖσι καθεύδει (hanika dè kai saýros en haimasiaisi katheýdei) 「今この時、トカゲも石の壁の中で眠っている」『エイデュッリア』Ⅶ, 22。テオクリストスが単にトカゲと言ったところを、ウェルギリウスは自身の観察に基づく「緑色の」という形容詞を冠し、一段と情景を絵画的に優美なものにしている。8～13の6行の対句的構造については先に少し触れたが、とりわけ nunc etiam (8), nunc viridis etiam (9) と同語を反復して(まったくの同一を避けて9行目は viridis と間にはさんだところが、少し変化をもたらし、心にくい) 始まるこの両行は、涼しい木陰を求める家畜と茨の茂みに身を隠す緑色のトカゲを並置した、まことに精妙にも美しい対句となっている。一寸と杜甫の対句を思わせるではないか。

10 **Thestylis**: Thestylis, servante de ferme, prépare le *moretum*, mets composé d'ail, de fromage, de vinaigre, d'huile, que mangeaient les gens du peuple, et qui réveille l'appétit engourdi par une chaleur dévorante.¹¹ *moretum* を O. L. D. (Oxford Latin Dictionary) は a dish made with cheese and pounded herbs と説明している。

rapido...aestu: 激しい暑さで。形容詞 rapidus は「引き裂く、ちぎる、奪う」といった意を本義とする動詞 rapio に由来する。la chaleur violente=*qui rapit*, qui s'empare de tout comme d'une proie.¹²

11 **alia serpullumque herbas contundit olentis**: alia と serpullum は herbas olentis の同格。serpullum (also-yl, -il): Any sort of thyme, esp. the wild, creeping kinds. (O. L. D.) olentis はここでは良い香り bene olentis ではなく、むしろ臭い、匂いの強烈な graviter olentis¹³ということ。Collection Latomus の



L. Hermann 訳が参考になる。すなわち, *Thestylis broie l'ail et le serpolet, ces plantes aux fortes senteurs.*¹⁴ なお10～11行目に描かれた光景は、我が最愛の画家ニコラ・プサンの晩年の傑作、ルーヴル美術館所蔵の連作『四季』の中の、麦の刈り入れを描いた「夏」を思い起こさせるものがある（図版参照）。

12～13 *At mecum raucis, tua dum uestigia lustrō, sole sub ardenti resonant arbusta cicadis*: 語順をわかり易く変えれば, *At dum lustrō tua vestigia sub sole ardenti, arbusta resonant mecum raucis cicadis*, とでもなろうか。Forbigerによれば *vestigia lustrō* とはすなわち *obseruo diligenter et sequor*, また *mecum resonant arbusta cicadis* は *cicadis stridentibus et me simul cantante*.¹⁵ いくつか代表的な訳をあげれば, *But as I scan your footprints, the copses under the burning sun ring with shrill cicada's voice along with mine.*¹⁶ *Mais moi, rôdant sur la trace de tes pas, sous le soleil ardent, je fais, avec les rauques cigales,*

résonner les vergers.¹⁷ Mais tandis que je suis tes traces sous le brûlant soleil, de mon chant résonnent les arbustes en même temps que du bruit des rauques cigales!¹⁸ 有名なヴァレリー訳は、Mais moi, sous le soleil ardent, qui pas à pas te suis, mêlant ma voix au concert des cigales.¹⁹ Io invece insegno le tue tracce: dai filari, sotto il sole ardente, rauche cicale rispondono al mio canto.²⁰ しかし *mecum* を「歌う私」とするのではなく、単に、一人孤独にさまよう私に、と解釈するものもある。But I, while vineyards ring with the cicadas' scream, retrace your steps, alone, beneath the burning sun²¹. レクラム版では、Doch unter glühender Sonne, da deinen Spuren ich folge, shrillt aus den Büschen für mich das rauhe Gezirp der Zikade.²² Ma mentre segno le tue tracce mi accompagna dagli arbusti sotto il sole rovente il canto delle rauche cicale.²³

12 **raucis**: ウェルギリウス好みのしわがれ声、かすれ声。第一歌には *raucæ, tua cura, palumbes* 「君の好きな、しゃがれ声のジュズカケバト」とあった。ここでは「しわがれ声の蟬」だが『農耕詩』では *cantu querulae rumpent arbusta cicadae* (Ⅲ, 328) 「蟬の嘆き節で雑木林が震える」とある。しかし蟬といえは、プラトンの『パイドロス』の一節がどうしても耳に響いてくる。一寸と横道になるが引用しておこう。「プラタナスが亭々として大きくその枝を広げ、またアグナスの大木が鬱蒼と茂って、みごとな緑蔭をつくっている。枝々には今を盛りと花が咲きほこり、何と香ぐわしい香りをこの辺りに放っていることか。そしてまたプラタナスの下を潺湲と流れるこよなく美しい泉の水の冷たさが、浸した足に実に爽快に感じられる。……それにまた、ここを吹きぬけていく風の何とよるこばしいこと。いかにも爽やかではないか。蟬たちの合唱にこだまして、夏らしく、冴えたひびきを立てている」。²⁴

14 **Amaryllidis**: 第一歌の純情で貞淑なアマリリスとはこと違って、このアマリリスはヒステリックで高慢な女。

tristis Amaryllidis iras: Amarillis' sullen rage,²⁵ les sombres colères d'Amaryllis,²⁶ den Jähzorn der Amaryllis,²⁷ le collere stizzose di Amarilli,²⁸ しかし *tristis* を怒りにではなくアマリリスにかけるものもある。たとえばヴァレリーの *les fureurs d'Amaryllis la sombre*²⁹ あるいは *le ire della trista Amarilli*.³⁰

15 **nonne Menalcan:** *nonne pati* Menalcan……牧人メナルカスはここでは単にその名が触れられるだけだが、第三歌、第五歌では、歌合戦の一方の当事者として登場し、さらに第九歌ではウェルギリウス自身の面影を宿す詩人である。

16 **niger...candidus:** 黒いというのは、日焼けして浅黒いということ。 *niger* indique ici des cheveux noirs, un teint basané; *candidus* un teint blanc, probablement celui d'un blond, opposé à un brun.³¹ 田舎（黒）と都会（白）の対照。 *basané*, parce que c'est un paysan, tandis qu'Alexis vient de la ville.³²

esses: *tu sis* と接続法現在ではなく、*tu esses* と接続法未完了過去であるのは、14行目の *fuit* との時制の一致（*concordance des temps*）故だと Plessis et Lejay は説明するが、³³ Perret はこう解釈する。 *Le prétérît s'explique-t-il seulement par la concordance des temps? Il pourrait être plus important: non pas tu es blanc, mais tu étais blanc (le jour où je t'ai entrevu et dont le souvenir ne cesse de me hanter).*³⁴

18 **Alba ligustra cadunt, uaccinia nigra leguntur:** Geymonat はこの詩句は *luogo commune* 常套句、決まり文句に、違いないとする。³⁵ 第十歌（38～9）にも似たくだりがある。 *quid tum, si fuscus Amyntas? et nigrae violae sunt et vaccinia nigra* 「アミュンタスが浅黒いからといって一体何だ？ スミレだって黒いし、ヒヤシンスも黒い」。ちなみに、第二歌同様十歌も、ガルスのリュコーリス（こちらは女性だが）への不幸な恋、報われぬ愛をテーマとする。 *ligustrum*: [perh. from *LIGVS*] A white-flowered shrub, prob. privet. *vaccinium*: A dark-

flowered plant corresponding to the *γραπτὰ ὑάκινθος* (*graptà hyákynthos*) of Theocritus 10. 28 (variously identified, perh. an orchid or fritillary). O. L. D.

cadunt : 花束や花輪を作るために摘まれることなく。

19 **Despectus tibi sum** : *despicio, ere, spexi, spectrum* (de + *specio*) の本義は「見おろす」 to look down upon, regarder d'en haut 例 *Iuppiter aethere summo despicens mare* 「ユピテルは天の上から海を見おろし」『アエネーイス』 I, 223～4

qui sim : *quis* 「誰であるか」ではなく *qui* 「どんな人間か」。Quelques manuscrits d'ordre inférieur et quelques anciennes éditions portent *quis sim*, mais l'autre leçon est bien préférable; *qui sim*, quel homme je suis, est précieusement développé par les vers qui viennent après.³⁶

20 **diues peroris** : *dives* 「豊かな」ここでは属格を取っているが、奪格を取ることもある。例, *opum dives rex* (オウディウス), *dives templum donis* (リヴィウス)

nivei...lactis abundans : *abundans* 「豊富な」も又属格と共に奪格をも取る。例, *via omnium rerum abundans* (ネボス), *abundans bellicis laudibus* (キケロ)。*nivei* 「雪のように白い」をセルウィウスは, *multi...legunt 'nivei quam lactis' sed melius est 'quam dives pecoris nivei' nam candidae oves in ingenti sunt pretio*³⁷と, 「乳」より「家畜」にかけるべきだとするがいかなものか。

21 **Mille meae Siculis errant in montibus agnae** : *Siculis*, cette désignation de lieu où se passe la scène est la conséquence des imitations de Théocrite (さらには, テオクリトスへの hommage のしるし), dont l'Eglogue est remplie.³⁸ 『エイドュツリア』 X I, 34に *βοτὰ χίλια βόσκω* (*botà chília bósco*), 「僕は千頭の羊を飼っている」。 *errant, cum securitate pascuntur*.³⁹ Le mot (*errare*) appartient à la langue des paysans: il se dit du bétail qui paît en liberté sans

être attaché.⁴⁰ なおこの詩句に関して、クルチウスが述べている所が忘れ難い。彼は若い頃、偶々『牧歌』をひもといて、この個所に行き当たる「その詩句は、これまで知らなかった幸福感で私の心を充たした。——我が千頭の子羊はシチリアの山々を放浪^{さすら}い行く——この言葉は魔法のように私の心を感動させました。当時はまだ一度もイタリアに行ったことがなかった。けれども不意に、南国の風景が眼前に展がりました。山々、羊の群れ、海の深い紺碧に向かって開ける展望」。⁴¹

22 *lac mihi non aestate nouom, non frigore defit* : τυρὸς δ'οὐ λείπει μ'οὐτ' ἐν θέρει οὐτ' ἐν ὀπώρα οὐ χειμῶνος ἄκρω (tyròs d'ou léipei m'out'en thérii out'en opórai ou cheimônos ákrō) 「夏も秋も厳しい冬にも、僕にはチーズに事欠くことはない」『エイデュッリア』X I, 36~7。セルウィウスは、年中チーズを欠かさないことより、新鮮なミルクに事欠かないことの方が *multo melius* で *laudabile*⁴² だと言う。

23 *Canto quae solitus* : quae solitus est cantare

24 *Amphion Dircæus in Actæo Aracyntho* : アンピオン *Ἀμφίων* は、ゼウスとアンティオペーの子、山中に捨てられ、羊飼いに育てられた。豎琴の名手となり、テーバイの城壁は彼のかなでる美しい音色につれて、石がひとりでに動いて築かれたと伝えられる。なおヴァレリーに、これに材をとった *mélodrame AMPHION* がある。Amphion, roi fondateur de Thèbes; la fontaine de Dircé se trouvait près de cette ville. L'Aracynthe est un mont situé entre la Béotie et l'Atique; or l'Acté était l'ancien nom de l'Attique.⁴³

25 *Nec sum adeo informis* : *Adeo*, à ce point, au point de ne pouvoir plaire; il va même dire qu'il est aussi beau que Daphnis.⁴⁴ *Καὶ γάρ θην οὐδ' εἶδος ἔχω κακόν, ὥς με λέγοντι* (Kai gár thên oud' eidos échō kakón, ós me légonti) 「それに僕は人が言うほどそんなに醜くはない」『エイデュッリア』VI, 34

25~26 *nuper me in litore uidi, cum placidum uentis staret mare* : Ἡ γὰρ πρᾶν ἐς πόντον ἐσέβλεπον, ἥς δὲ γαλάνα (Ê gâr prân es pónton eséblepon, ês dê galána) 「ついこの間、凪いだ海に自分を映してみた」『エイデュッリア』VI, 35 *ventis*, 手段を表す奪格、風には波を荒立てるだけではなく、又それを静める力もあったとされていた。⁴⁵ この詩句に関するセルウィウスの注が面白いので少し引用しておく。INLITORE VIDI CVM P. V. S. M. negatur hoc per rerum naturam posse fieri; sed Theocritum secutus est, qui hoc dicit de Cyclope. sed illic est excusatio, vel quia ingentem habet oculum Cyclops, vel quia filius Neptuni est.⁴⁶ Plessis et Lejay はしかし、地中海では姿を映し見ることもあながち不可能とは言えないとし、⁴⁷ さらに Rat は、Peut-être d'ailleurs Virgile, que Théocrite entraîne, transporte-t-il ici dans la mer de Sicile, une scène qui a eu lieu dans le lac de Mantoue.⁴⁸

26 *Daphim* : ダブニス Δάφνης はシシリアの羊飼ひ。きわめて美しく又卓越した歌の才を持ち、牧歌の創始者とされる。第五歌はこのダブニスに捧げられている。

28 *sordida rura* : sordidus は「きたない、粗末な、いやしい」などといった意の形容詞だが、「田舎」という語にはいささかそのような含意もあるので、単に「田舎」と訳した。諸訳を少々、our rude fields,⁴⁹ the rough countryside,⁵⁰ la campagne misérable,⁵¹ une pauvre campagne,⁵² mon pauvre village,⁵³ レクラム版の独訳は単に auf dem Lande,⁵⁴ le rozze campagne.⁵⁵

30 *uiridi compellere hibisco* : *hibiscum*, (prob.) Marsh mallow (湿地のアオイ科の植物) O. L. D. Maurice Rat の注釈には、L'*hibisus* est une sorte de mauve très haute, la guimauve dont la tige servait à fabriquer des houlettes et divers objets rustiques.⁵⁶ とあり、第十歌71の詩句を引用している、*gracili fiscellam textit hibisco* 「細い葵の茎で小さな籠を編む」。 *uiridi hibisco* は、与格か奪格か

意見の分かれる所である。たとえばセルウィウスは, *ad hibiscum compellere* と与格ととる⁵⁷が, Coleman は手段・道具を示す奪格であるとする。すなわち *with a green marsh mallow switch. The tough mallow rushes were pliant enough to be used for baskets and the flowering stem, which grows to upwards of a metre, would also make a supple switch, especially when it was fresh-cut (viridi),*⁵⁸ 諸訳も又二つに別れる。与格派は, *to the green mallows,*⁵⁹ *vers la mauve verdoyante,*⁶⁰ *vers la verte guimauve,*⁶¹ *in grünenden Eibish,*⁶² *al verde ibisco,*⁶³ *alla pastura della verde malva.*⁶⁴ 一方奪格派は, *with green hibiscus,*⁶⁵ *with a green marsh-mallow switch,*⁶⁶ *à coups de rameau vert,*⁶⁷ *mit Ruten von Eibish.*⁶⁸ 訳注者は, 「一本の緑色の葵のムチで」と解した方が, イメージが鮮烈だと思う。9行目の「緑色のトカゲ」と共に, しなやかに緑色の茎のムチは, 一篇の詩にあざやかな, 清んな色を点じている。

31 **Pana:** パーン Πάνη は, アルカディアの牧神。毛深くて角を生やし, 山羊のようなひづめのある脚で山野をかけめぐる。音楽を好み, 自ら発明した葦の茎を合せた笛 (シューリンクス) をいつもたずさえている。

33 **ouis ouiumque:** *Elégante répétition qui évite l'emploi du pronom earum.*⁶⁹

34 **Nec te paeniteat calamo triuisse labellum:** *trivisse* は *tero, ere, trivi, tritum* の完了形不定法。*trivisse* is either perfect or more likely aoristic-present in meaning.⁷⁰ *labrum* 「唇」の縮少辞 *labellum* に関しては, *labellum:* the diminutive, though perhaps literally appropriate for the boy, has emotive connotations of tender affection.⁷¹ Cartault はこの34行目の詩句はきわめて繊細なものであり *très galant* だと言う。⁷ *labellum* の諸訳は, *your lip,*⁷³ *your delicate lip,*⁷⁴ *ta lèvre,*⁷⁵ *ta lèvre mignonne,*⁷⁶ *ta lèvre tendre,*⁷⁷ *die Lippe,*⁷⁸ *il tuo labruzzo* (さすがに縮少辞の異常に? 発達したイタリア語),⁷⁹ *il soave labbro*⁸⁰

35 **quid non faciebat Amyntas?**: アミンタスはコリュドンと同じく音楽の好きな羊飼いい。 *faciebat*, l'imparfait ici employé parce que le fait n'est pas ancien.⁸¹

37 **fistula**: *fistula* は「管, パイプ」が本義だが, ここではもちろん a shepherd's pipe, pipes of Pan, syrinx; flûte de Pan.

Damoetas: やはり羊飼いい。コリュドンの先輩で笛の名手。同名の牧人は第三歌では, メナルカス相手に歌合戦をする。

dono mihi: 二重与格。Certains verbes sont accompagnés de deux datifs: l'un, *de destination* (en vue de quoi?) ou *de résultat* (aboutissant à quoi?), l'autre, *d'intérêt* (pour qui?). 例 *Milites auxilio urbi misit. Hoc erit tibi dolori.*⁸²

38 **secundum**: *Secundum* ne désigne pas seulement un ordre de succession dans la propriété de l'instrument, mais sans doute aussi une qualité d'excellence.⁸³

dixit...dixit (39): *dixit* と二度くり返すのはダモエタスの言葉にいつそうの重きを与えるものだが, 他方37~9のわずか3行の詩句で Damoetas (37), Damoetas (39), dixit (38), dixit (39) とくり返すのは, コリュドンの稚気を示す。さらに Coleman の言葉を借りれば, the colloquial naivety of the immediate repetition of the verb underlines Corydon's pride in his music.⁸⁴

40 **nec tuta mihi ualle**: コリュドンが危険を冒してまで捕らえたことは, 二頭の子鹿に一段と価値を与える。

41 **capreoli**: *capreolus* [CAPREA+-OLVS], the young of the roe-deer. O. L. D. ノロジカ [ヨーロッパ・アジア産の敏速・優美な小型の鹿] 『新英和大辞典』研究社

sparsis etiam nunc pellibus albo: Parce qu'ils sont tout jeunes: le pelage des chevreuils porte à leur naissance des taches blanches, qui disparaissent vers l'âge de six mois.⁸⁵

42 **bina die siccant ouis ubera**: *bina* を *ubera* にかかるととるか, それとも *die*

にかかるとするのか解釈が分かれる。前者は例えば, (they) drain daily two ewe-udders.⁸⁶ chaque jour, ils tarissent deux mamelles de brebis.⁸⁷ Il leur faut chaque jour deux mamelles de lait.⁸⁸ chaque jour ils tarissent les deux pis d'une brebis.⁸⁹ prosciugano tutti i giorni due mammelle di pecora.⁹⁰ 後者は, drain a ewe's udders twice a day.⁹¹ Twice a day they suck their ewe dry.⁹² due volte al giorno succiano le poppe di una pecora.⁹³ zweimal am Tage saugen des Mutterschafs Euter sie leer.⁹⁴ なお *siccant* 「空にする」は, 子鹿の健康と生命力を明示するものだと Cartault は記している。⁹⁵

44 **et faciet** : and she will do so; et elle le fera. *Et* ainsi placé ajoute au sens du verbe celui de la menace, en unissant cette proposition à la précédente.⁹⁶

45~55 : Huc ades 「ここにおいで」と, アレクシスへの呼びかけで始まるこの一節に於いて, 詩は最高の高まりを示す。前節でコリュドンは現実の田舎生活の魅力をいろいろと述べ立てたが, いきなり我々はここで, 美しく香り高い花々に満ちた夢の世界に突入する。

46 **ecce** : *ecce* anime la phrase et met sous les yeux le petit tableau qu'imagine Corydon.⁹⁷

Nymphae : *nympha* (νύμφη) は山, 森, 草原, 泉等の精, 若く美しい女性と見なされていた。semi-divine female spirit of nature.

calathis : *calathus* (κάλαθος) désigne tantôt une corbeille, tantôt un vase; l'un et l'autre ayant sans doute une même forme, évasée par un haut.⁹⁸

candida Nais : *Nais* または *Naias* (ναΐς, ναΐας) は泉や川のニンフ。*candidus* は bright, radiant 等が本義だが, そこから派生して O. L. D. は, 人や神が fair-skinned, fair (usu. implying beauty) の意とし, *candida* Dido, Venus...dea *candida* (『アエネーイス』 V, 571, VIII, 608) 等の例を引いている。

47 **pallentis uiolas** : The name given to several spring flowers (O. L. D.). On

s'est demandé si c'étaient des giroflées (ニオイアラセイトウ) ou des primevères (桜草); les unes et les autres fleurissent avant les pavots (ケシ); pourquoi ne seraient-ce pas tout simplement des violettes (スミレ)? Il y en a de pâles comme de foncées; il y en a même de blanches.⁹⁹

summa papauera : ケシはひょろりと茎が長いのでその花の部分を *summus* と言ったのか。諸訳も様々である。poppy-heads,¹⁰⁰ poppy-crests,¹⁰¹ les pavots en tiges,¹⁰² les pavots superbes,¹⁰³ des pavots hauts perchés,¹⁰⁴ pavots,¹⁰⁵ il colmo des papaveri,¹⁰⁶ alti papaveri,¹⁰⁷ i più bei papaveri,¹⁰⁸ Blüten des Mohns,¹⁰⁹ vom Mohn die üppigen Blumen¹¹⁰

48 **anethi** : probablement le fenouil¹¹¹ (茴香) Coleman はこれを dill 「イノンド」とする。'Dill' was a common garden herb in antiquity, used in garlands and in cooking. Its small yellow flowers appear in midsummer.¹¹²

49 **casia** : An aromatic shrub, perh. mezereon (洋種沈丁花) or marjoram (マヨラナ, はっかに似た薬用・料理用植物) O. L. D.

50 **mollia...uaccinia** : *mollia* は *vaccinia* にかかる。 *vaccinia* は18行目に既出。 *mollia* which introduces a tactile element into the imagery implies a contrast with the firm bunched petals of the marigold.¹¹³ 一方 Saint-Denis は、ヒアシンスの濃く暗い色の花はキンセンカの鮮やかな黄色を引立てると述べている。¹¹⁴

luteola...calta : *calt (h) a* は英語の marigold, 仏語の souci, すなわち「キンセンカ」。念のため49～50行目の花名の格を示しておけば, *casia*, *aliis suavis herbis*, *luteola calta*, の三者は手段・道具の奪格。 *mollia vaccinia* が対格。

pingit : 「描く」の意から, ここでは「美化する, 引き立てる」。

51～54 : *legam*, *addam*, *erit*, *carpam* と未来形が続くのに注意。

51 **cana...tenera languine male** : セルウィウスの *mala dicit Cydonea, quae languinis plena sunt* を引用して, Saint-Denis はウェルギリウスのエレガント

な *périphrase* は *coings* すなわちマルメロを指すとする。¹¹⁵

52 *castaneasque nuces* : *nux* étant le nom générique des fruits à amande, les châtaignes sont une espèce de *nuces*,¹¹⁶ 栗とくるみ, ではなく栗の実。

53 *cerea pruna* : 蠟色の, つまり黄色の李はもつとも珍重された。

54 *lauri...myrte* : The myrtle (天人花) was sacred to Venus as the bay (月桂樹) was to Apollo. The combination of the two represents the union of love and music.¹¹⁷

56 *Rusticus es, Corydon* : 突然の転調, コリュドンは夢想から再び現実に引き戻され, 「お前は愚かな田舎者にすぎない」と自分に呼びかける。 *rusticus* is sharply contrasted with *urbanus* in both senses: 'a country-dweller' and 'a boor'.¹¹⁸

57 *certes...concedat* : 共に接続法現在。単に仮定の事柄。

Iollas : 2行目の *dominus* と同一人物。アレクシスの, そしてあるいは又コリュドンの主人。イオラスの名は第三歌 (76, 79) にも登場する。

58 *Eheu!* : *heu* と同じ。苦痛, 悲痛を表す間投詞。 *ehéu (heu), me miserum, ah!* malheureux que je suis.

58~59 *Floribus Austrum/perditus et liquidis immisi fontibus apros* : (*Ego amore*) *perditus, immisi Austrum floribus et (immisi) apros liquidis fontibus*. *auster* は南風, とりわけ北アフリカから地中海を越えて, 南ヨーロッパに吹く熱風, イタリア語のシロッコ *scirocco*.

60 *demens* : (de, mens) out of one's mind, senseless; privé de raison, insensé.

61 *Dardanius* : *dardanius*, of or descended from Dardanus (a son of Zeus and Electra who founded Dardania in the Troad, an ancestor of Priam), of or belonging to Troy, Trojan. O. L. D.

Paris : パリス *Πάρις* はトロイアの王プリアモスの子。赤児の時イーデー山

中に捨てられ、5日間熊によって育てられた。また羊飼いたちに拾われて育てられたとも言われる。

Pallas : パラス *Παλλάς* はアテーナー女神の別名。アテーナーはもちろん、アテネのアクロポリスの女神。Elle était considérée comme la protectrice des villes fortifiées.¹¹⁹

62 **colat** : 願望を示す接続法。

nobis : *Nobis probablement pour mihi*; ou peut-être: «à nous autres, bergers».¹²⁰

63 ~ 65 **Torva leaena lupum sequitur, lupus ipse capellam; forentem cytisum sequitur lasciva capella, / te Coryon, o Alexi** : ‘*Α αἴξ τὰν κύτισον, ὀλόκος τὰν αἰγά διώκει, / ἃ γέρανος τῶροτρον ἐγὼ δ’ ἐπὶ τὴν μεμάνημαι*. (Ha aix tὰn kýtison, ho lýkos tὰn haíga diókei, / ha géranos tótrotron; egó d’epi tìn memánēmai.) 「山羊はうまこやしを、狼は山羊を追いかけて、すき鶴は犁の後を追う。そして僕は君に夢中だ」
『エイデュッリア』X, 30~1

63 **leaena** : 男性形は leo (λέων), 女性形は lea または leaena. The choice of the feminine may be metrical, since *torvus leo* would be less tractable; but it also contributes to the chiasitic gender pattern: *leaena, lupum, lupus, capellam*.¹²¹

66 **Aspice...** : Corydon s’adresse à lui-même et marque le contraste entre la paix et le repos qui règnent partout, et le trouble de son cœur.¹¹²

67 **sol crescentis decedens duplicat umbras** : 第二歌もまた夕刻の訪れと共に詩は閉じられる。第一歌の最終行は, maioresque cadunt altis de montibus umbrae 「高い山から落ちる日影がだんだん大きく伸びてきた」。

68 **adsit** : 可能性を表す接続法。adsit=potest adesse

69 **A! Corydon, Corydon, quae te dementia cepit?** : ᾠ Κύκλωφ Κύκλωφ, πᾶ τὰς φρένας ἐκπεπότασαι ; (ὁ Κύκλωψ Κύκλωψ, παῖ τὰς φρένας εκπεπótasai?) 「ああ、キュクロース、キュクロース、お前の理性はどこに飛び去ったのか?」

『エイドユッリア』XI,72

70 *Semiputata tibi frondosa uitis in ulmo est* : ニレはブドウの支柱 (添え木)。

L'ormeau servait (et sert encore) de tuteur à la vigne; on mariait la vigne à l'ormeau. Mais il fallait tailler la vigne, et aussi l'ormeau, pour qu'il n'étouffât pas la vigne. Trait de réalité géorgique qui s'ajoute, comme celui des v. 66 (charrue) et 10 (moisson), au paysage bucolique.¹²³

71 *Quin tu aliquid saltem potius, quorum indiget usus* : *quin*, why not? pourquoi ne pas? *saltem* 「少くとも」は *aliquid* にかかる。aliquid (*eorum*) quorum indiget usus.

71~72 : 甲斐ない思いにふけられないで有益なことをなせと、正気に返れと、テオクリストスは『エイドユッリア』X73~5でおおよそ次のように言う。「籠を編んだり、子羊のために新芽を摘んだ方が、はるかにまともなことだろう」。

73 *Invenies alium... Alexim* : *εὕρησεῖς Γαλάτειαν ἴσως καὶ καλλίον' ἄλλαν*. (heyrēseis Galáteian ísōs kai kallíon állan.) 「多分もっときれいなガラテイアを見つかるだろう」『エイドユッリア』XI,76

参考文献

- 1) E. Benoist, *Bucoliques et Géorgiques*, Hachette, paris, 1884
- 2) A. Cartault, *Etude sur les Bucoliques de Virgile*, Armand Colin, Paris, 1897
- 3) F. Plessis et P. Lejay, *Oeuvres de Virgile*, Hachette, Paris, 1913
- 4) L. Herrmann, *Virgile, Bucoliques*, Latomus Vol. X, Bruxelles, 1952
- 5) P. Valéry, *Oeuvres I*, Gallimard, Paris, 1957
- 6) H. des Abbayes, *Virgile, Les Bucoliques*, Latomus vol. LXXXIV, Bruxelles, 1966
- 7) M. Rat, *Les Bucoliques, les géorgiques*, Flammarion, Paris, 1967
- 8) E. de Saint-Denis, *Virgile, Bucoiques*, Les belles lettres (Budé). Paris, 1967
- 9) J. Perret, *Virgile, Les Bucoliques*, Presses universitaires de France, Paris, 1970
- 10) J. P. Chausserie-Laprée, *Bucoliques*, La, Différence, Paris, 1993
- 11) G. Stroppini, *Amour et dualité dans les Bucoliques de Virgile*, Klincksiek, Paris, 1993
- 12) H. R. Fairclough, *Virgil I*, Loeb classical library, 1916
- 13) T. S. Royds, *Eclogues and Georgics*, Dent, London 1746

- 14) E. V. Rien, *Virgil, The pastoral poems*, Penguin Classics, 1954
- 15) R. Coleman, *Virgil, Eclogues*, Cambridge University Press, 1977
- 16) A. G. Lee, *Virgil, The Eclogues*, Penguin Classics, 1984
- 17) N. Horsfall, *A companion to the study of Virgil*, E. J. Brill, 1995
- 18) *Virgil in English*, Penguin Classics, 1996
- 19) B. H. Fowler, *Virgil's Eclogues*, the university of North Carolina Press, 1997
- 20) L. Canali, *Virgilio, Bucoiche*, Biblioteca Universale Rizzoli, Milano, 1978
- 21) M. Geymonat, *Bucoliche*, Garzanti, 1981
- 22) M. Cesson, *Virgilio, Bucolica-Bucoliche*, Mursia, Milano, 1986
- 23) M. Cavalli, *Virgilio, Bucoliche*, Mondadori, Milano, 1990
- 24) *Enciclopedia Virgiliana V***, Enciclopedia Italiana, Roma, 1991
- 25) T. Haecker, *Virgil, Hirtengedichte, Vater des Abendlandes*, Fisher-Bücherei, 1958
- 26) H. C. Schnur, *Virgil, Hirtengedichte*, Reclam, Stuttgart, 1968
- 27) *Die römische Literatur, Augusteische Zeit*, Reclam, Stuttgart, 1987
- 28) B. Kytzler, *Römische Lyrik*, Reclam, Stuttgart, 1994
- 29) A. Forbiger, *P. Virgilii Maronis Opera Pars I.*, Lipsiae, 1852
- 30) *SERVII GRAMATICI qui feruntur in Vergilii Bucolica et Georgica*, Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri, 1927
- 31) 越智文雄, 『田園詩・農耕詩』生活社, 1947
- 32) 河津千代, 『牧歌・農耕詩』未来社, 1981
- 33) 小川正廣, 『ウェルギリウス研究』京都大学学術出版会, 1994
- 34) *Lexikon zu Vergilius*, Olms, Hildeshein, 1969
- 35) *Bucolicorum Latinorum Poetarum Lexicon*, Olms, Hildeshein, 1996

補注

- (1) 参考文献15, P.91 (以下単に15—P.91と表記)
- (2) 3—P.10 (3) 9—P.28 (4) 29—P.22 (5) 3—P.10
 (6) 30—P.18 (7) 9—P.28 (8) 1—P.15 (9) 9—P.28
 (10) 1—P.15 (11) 1—P.15 (12) 3—P.10 (13) 3—P.10
 (14) 4—P.23 (15) 29—P.24 (16) 12—P.11 (17) 8—P.44
 (18) 4—P.23 (19) 5—P.231 (20) 23—P.15 (21) 16—P.39
 (22) 26—P.7 (23) 20—P.67 (24) 北嶋美雪編訳『ギリシャ詩文抄』平凡社, 1994,
 P.110 (25) 12—P.11 (26) 8—P.44
 (27) 26—P.7 (28) 23—P.28 (29) 5—P.231 (30) 22—P.41
 (31) 3—P.11 (32) 9—P.29 (33) 3—P.11 (34) 9—P.29
 (35) 21—P.16 (36) 1—P.16 (37) 30—P.21 (38) 1—P.16
 (39) 30—P.21 (40) 8—P.101 (41) E.R. クルツィウス『ヨーロッパ文学評論集』みす
 ず書房, 1991, P.18
 (42) 30—P.21 (43) 8—P.108 (44) 3—P.11 (45) 1—P.17
 (46) 30—P.22 (47) 3—P.12 (48) 7—P.186 (49) 12—P.13

- (50) 19—P.28 (51) 8—P.45 (52) 7—P.40 (53) 5—P.231
 (54) 26—P. 7 (55) 20—P.69 (56) 7—P.186 (57) 30—P.23
 (58) 15—P.98 (59) 12—P.13 (60) 8—P.45 (61) 7—P.40
 (62) 25—P.62 (63) 21—P.17, 22—P.43 (64) 20—P.25
 (65) 16—P.39 (66) 19—P. 4 (67) 5—P.231 (68) 26—P. 7
 (69) 1—P.18 (70) 15—P.99 (71) 15—P.99 (72) 2—P.82
 (73) 12—P.13 (74) 19—P. 5 (75) 4—P.24 (76) 8—P.45
 (77) 6—P.23 (78) 26—P. 7 (79) 21—P.19 (80) 20—P.69
 (81) 1—P.18 (82) *Grammaire Latine*, Nathan, Paris, 1991, P. 108
 (83) 9—P.31 (84) 15—P.100 (85) 7—P.186 (86) 18—P.235
 (87) 8—P.45 (88) 5—P.233 (89) 4—P.25 (90) 20—P.69
 (91) 12—P.13 (92) 19—P. 5 (93) 22—P.43 (94) 26—P. 8
 (95) 2—P.82 (96) 1—P.19 (97) 3—P.13 (98) 8—P.108
 (99) 3—P.13 (100) 12—P.13 (101) 18—P.236 (102) 8—P.45
 (103) 7—P.40 (104) 4—P.25 (105) 6—P.23 (106) 20—P.69
 (107) 22—P.43 (108) 23—P.17 (109) 26—P. 8 (110) 25—P.14
 (111) 3—P.13 (112) 15—P.102 (113) 15—P.102 (114) 8—P.109
 (115) 8—P.108 (116) 8—P.109 (117) 15—P.103 (118) 15—P.104
 (119) 3—P.14 (120) 3—P.14 (121) 15—P.105 (122) 1—P.21
 (123) 8—P.116